

ふるさと 風

第55号 (2010年12月)

風に吹かれて (34)

白井啓治

『お猫様大満足 小春日和に尻尾振る』

ことは座の第19回公演が終わり、暫くのんびりしたいと毎日お猫様を抱いてゴロゴロしていたら、怠惰がすっかりと身につけてしまい、何かやる事が出来ても明日から、明日からと先延ばしにしていたら、もう12月になってしまった。これはいかんという事で、文神聖漱石に倣ってというわけではないが、陽だまりの縁側にお猫様を抱いて、ゴロゴロしながらこう考えた。

「閉塞とは未来への希望が見えない時に起こる行き詰まりの状態の事をいう」と。閉塞の意味は「とざされてふさがること」であるが、とざされてふさがるとは、所謂「行き詰まること」である。そして何故行き詰まるのかと考えれば、先に進むべき道を探せなかったり、道がなかったりするからである。

さて、聖人漱石先生は山路を登りながら、方丈記の如くに、智に働けば角が立ち、情に棹さすと流される。意地を張れば窮屈である。兎角に人の世は住みにくいもの、とぼやきの如くに考えを呟いておられる。

で、この小生はお猫様と怠惰にゴロゴロしながら

ら考えるのであるから、せめてその罪滅ぼしではないがデカンショの真似ごとに「生きるとは何ぞや」などとの哲学を頭においての閉塞についてを考えてみた。

人は何故現在を生きるのか。それは、次世代に對しての希望を作るために現在を生きているのである。何故なら、人間は、生き物は子孫を残すために現在の命を与えられているからである。

己の子孫を次の世に残すためには、次の世に生きねばならない必然性を構築し己の子孫に持たせてやらなければならない。子孫に對して次世代に持たせてやる生きる必然性とは、哲学いや文学風に言うならば、それは希望であろう。希望とは夢とか意義と置き換えられるものであろう。

人は、その地に希望を感じることが出来るからその地に暮らすのであって、もしその地に希望が見えなければ、何処かにいってしまふ。実に単純で明快なことである。

商店街に人が来なくなつた。それはその商店街に魅力がないからであり、不景気だからではない。同様に、街に人がいなくなつたというのは、その街に魅力がないからである。魅力とは希望と置き換えれば良いだろう。希望が予感させられる、希望を夢として描くことが出来るから、そこに惹きつけられる力、即ち魅力がうまれるのである。

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会の会報もお陰様で55号となりました。

当会では、ふるさととの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、ふるさとと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井啓治 0299-24-2063
兼平ちえこ 0299-26-7178

打田昇三 0299-22-4400
伊東弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com>

閉塞感というのは、希望を能動的に思考することが出来なくなつた時に生じる無気力な感覚である。希望というのは自分が創造するものであり、誰かが造ってくれるものではないので、いくら待たせていても生まれることはない。

閉塞とは「行き詰まる」ことであり、行き詰まりは能動的に先を志向していても頻繁に生じるものである。しかし、閉塞感という精神的無気力はうまれない。逡巡と洞察という葛藤は繰り返されるが、精神的無気力に陥る事はない。無気力に陥つたとすれば、それは能動を捨て心に「棚から牡丹餅」を期待する「思考放棄」が生じたからに他ならない。

地球のあらゆる生物は、次の世代に種を受け継がせるために現在を生きている。それは地球に生物の誕生した時から繰り返され、この先も次世代のために現在を生きるといふ行動を永遠に続けるのである。これは生物のもつ不変的宿命なのであるが、どうやら人類だけがそのことを忘れ、否定すらしようとしている。

この3日に県議選が告示された。12日が選挙である。一様に景気回復だとか福祉優先だとかを叫んでいる。御立派なことである。しかし、こんな事を考えたことがあつただろうか。人間なる生物、初めに物を作る事（農業生産も含め）を思いついた。それで物をつくる時代が訪れた。その時代は今でも続いているのであるが、ある時から金をつくる時代がうまれた。しかし、今は金をつくれなくなり、金をつくる時代ではなくなつた。勿論、お金は物の流れの手段ではある。

金をつくる時代ではなくなつたとき、足元を見れば物もつくれなくなつてきている。立候補者諸

君、明日は何をつくる時代のですか。それを示さないで景気回復だ、福祉優先だと後ろを見ての政策しかないのであれば閉塞から沈没になつてしまふと思うのですが。

さてさて、話しを元に戻そう。閉塞感から脱する為には、もつと一人一人が能動的に自分の子孫に渡すべき夢を考えねばならない。この地に暮らす必然性としての夢の道は一本だけではない。その道の広がり無限は、過去の先人達の残してくれた文化としての歴史の中にヒントとして内包されている。

ここは歴史の里石岡である。閉塞した街に次世代への希望を想像し、紡ぎ出して行く為には、閉塞を導き出した現在の自分達に都合のよいことだけを歴史として考える事を止め、総てのものを文化遺産としてとらえ、そこに先達者達の託そうとした希望の芽を見出し、育てていくことが重要ではないだろうか。

入会3年

菅原茂美

2009年1月号に、「風」入会丸1年を経て、『いい歳をして、そろそろ吠え止まりにしたら…』という天の声が聞こえるが、どうにも止まらない…。と近況を述べた。

あれからもう2年。通算3年間。毎月欠かすことなく、独善と偏見を顧みず、人類学、環境保全の問題など私見を述べ続けてきた。

アフリカに発祥し、遙かなる旅路を経て、世界の各地に散つた人類。かなり血縁の近かつたはず

の同胞が、いつの間にか秩序ある繁栄ではなく、歴史が示すとおり、強者が弱者を捻りつぶす。人口が増え、強大な帝国が誕生すると、権力拡大のため、侵略を繰り返す。戦争のなかつた時代など、ほとんど見当たらない。

文明が最盛期を迎えてもなおかつ、その傾向は止むことを知らない。人間の欲望の奥深さ。特に近年は、全人類を何度でも滅ぼせるだけの核兵器を蓄え、理性を喪失し、のぼせ上つた人類。道徳も共栄の精神も有りはしない。各国はただひたすらに己の「エゴ」のみが優先する。国際機関はそれを抑止できない。そして今、物質文明繁栄の反動として環境破壊は著しい。生物多様性の減少。資源は枯渇寸前。CO₂増加による温暖化と、海水がCO₂吸収による酸性化で、海の生態系が崩壊する。自分達の子孫の安全さえ危ぶまれる。なんと「智慧なき万物の霊長」である。

私は地方公務員であつたので、現役中は、公正中立でなければならぬ。あまり大きな声でもの言えなかつた。ましてや今、毎号で吠えまくっているように、環境汚染を防ぐため、経済発展至上主義は止める！ スローライフを貫け！ 成果主義はけしからん！ などと、これら時勢に逆らう言葉を連発するなど、到底許されることではなかつた。『あいつ、気違いか？』…と、弾き出されるのが、関の山。長年沈黙を余儀なくされていた反動か？ 吠え始めたらどうにも止まらない。

しかし、現役を退き、全く自由の身になると、もう何一つ恐れるものもない。自由闊達に意見を述べる機会を与えられ、自分の言つたことに全責任を持つなら何を書いても構わない…と言われると、単細胞の私はいそいそその気になつて、言いたい

放題。品格とか上品さなど気にしない。単刀直入に、人間行動の醜さなどにメスを入れる。戦争・虐殺など人類が犯してきた歴史の数々。これからの人類の生存のためにも、歴史の汚点を黙って見過ごすわけにはいかない。そんなわけで、私の本会報投稿は丸3年を経たので、反省と今後の展望を述べてみたい。

私は、身近の些細な事にクレームをつけるケチなことは、言わないつもりだ。巨悪が許せない。強欲を突つ張り、世の中の何もかも一人占めしようとする権力者。他人の権利を簡単に踏みしり、己の強欲を満たそうとする。歴史に名を残した大王とか皇帝とか、家臣・兵卒の命など消耗品扱い。(労働者を過労死するまで酷使する企業)。その権力者を取り巻く賢い者達は、暴君を讃えて英雄に祭り上げ、ゴマを搦って己の地位を確保する。戦に負けた者は常に悪者扱い。賊を退治した：などと歴史書には記録されている。私に言わせれば真実は逆で、戦に勝つた方が、謀略・調略を巡らし、騙し討ちなどで正直者をねじ伏せた：というのが実状であろう。侵略における世界史の殆どは、こんなことであった。おとなしい先住民は、みなこうして、侵略者の毒牙にかかった。

そういうことが許せないから、私は歳を考えず、吠えまくる。そもそもこういう悪智慧で、己の欲望を満たそうとする人間行動の根幹をなす「深層心理」は、どこにあったのか。私なりに、その深奥に迫ろうとして吠えまくってきた。

イギリスに『老犬は無駄吠えをしない』という諺がある。若い犬なら、さもないことですぐ大騒ぎするが、経験豊かな老犬は物の真贋を見極め、本当に怪しいものにのみ、吠えつくということな

のであろう。悟りきったような小賢しいことを言うが、悪の度合いを見て、これは許せないと強く感じたものに、怯(ひる)むことなく、これからも一層「噛みつき老犬」に徹していくつもり。

人類は、この自然界において決して特別の存在ではないし、神に近い、慈悲深く、崇高な動物でもない。種の存続のため、自らをコントロールできる優れたものでもない。勿論、国際医療救援隊などのように、命がけで人道的な奉仕をする崇高な人々の存在は認める。ノーベル賞級の碩学には、心底から尊敬申し上げる。しかし、人類史の中で、残虐極まりない行為は数限りなく存在する。

人類とはこのように品格のない愚かな生物であったのかと、首を傾げたくなる面が多々ある。そしてあまりにも無秩序な繁殖・増殖を重ね、自己制御できない過剰人口で縄張り争いが絶えず、知略謀略を重ね、強欲を貫き通す。こんな面が、目立ちすぎる。狂った大脳がその意思を決定する。

【人間とは何か？ その本質に迫るDNAとは？ DNAという物質は、周りの物を栄養源として取り入れ、生きている細胞を単なる自己複製工場として、利己的に己のコピーを増やそうとする。DNAにとつて人類といえども、己が生き残るための単なる「乗り物にすぎない」と言われる。

DNAはA・T・G・Cという4つの分子で構成され、その分子の並べ替えで、それぞれの生物毎に設計図が描かれている。その原則は、全ての生物ともみな同じである。それゆえ地球上の全生物の起原は、今から40億年前(註1)海底で誕生した「ただ1個の原始細胞」であったといわれる。

薄い膜で囲まれた核酸とタンパク質。新陳代謝と増殖を繰り返す。これが現在の全生物の「ご先祖

様」だ。今日ではそのただ1個の細胞は分化(進化)して、動物界、植物界、菌界、原生生物界、モネラ(細菌)界の5界に分類されている。「絶滅・復活」を何遍も繰り返し、現在では150万種の生物が把握済み(未把握は数千万種)で、地球上は賑わっている。そして、太古のカンブリア紀以前に、他の界から「動物界」が独立し、延々と進化の坂を登りつめ、今日の人類に到達した。

(註1)数年前までは生命誕生は36億年前と言われた。今は40億年前といわれる。(137億年前ビッグバンで宇宙誕生。50億年前太陽誕生。46億年前地球誕生)。38億年前に最古の生物の痕跡(生痕化石)が現れる。24億年前、海底でシアノバクテリアが光合成で酸素を生成。(光合成を行う前の最古の生物は、硫化水素をエネルギー源としていた。)21億年前、大気中にも酸素急増・真核生物誕生。10億年前、単細胞から多細胞へ。7億年前、(生痕化石として)「動物」(腔腸動物・クラゲなど)が初めて現れる。5億年前に「オス」というものが現れる。5億年前、植物(コケ類)が陸上へ進出。3億年前、脊椎動物(両生類)が陸上へ進出。*大気中に酸素が満ちてくると、オゾン層が形成され、DNAを破壊する有害な紫外線などを吸収するので、生物は陸上に進出できた。】

こうして誕生した人類であるが、他の動物よりチョットだけ知能が優れ、一応文明も築いた。しかし現段階で、見事にコントロールされた統制のとれた、生物種というにはあまりにも遠すぎる。なぜそう言えるか？ それは、どれだけ進化しようが、年月を重ねようが、全てとは言わないが、己の欲望を満たす為に、その障壁となる相手を、殺害するまで自己を制御できないからだ。一般の

動物は、そこまでやらなくとも、相手が恭順の意を示せば、それ以上の攻撃はしない。自制すべき限界をキチンと弁えている。人類はそれができない。一個人の犯罪がそうであるし、集団としての国家間の戦争がそうである。トコトン相手を叩きのめすまでその手を緩めない。繰り返された人類の歴史を見れば、一目瞭然である。

現在、国連とか国際機関でも、人類全体を制御することができない。個々の問題は個人とか各国が、自己の責任において解決すべきこととして、一歩も前進が見られない。文明が進めば当然、各国が協調し、ともに繁栄を望むのは道理である。しかし、それぞれの欲望が強くなり、まず「己」が強くなる前に出てくる。東洋の仏教や儒教は、共栄の精神を説いたが、どちらかといえば肉食主体の西洋では、個人主義が重きをなし、個人の尊厳が表に強く出てくる。一歩間違えば、利己主義となり、手段を選ばず己の「利」のみが優先する。それゆえ、野生動物より理性的に劣ると言われても仕方がない面が多々見られる。

ではどうして人類はそんなジレンマの谷底に突き落とされたか？ それは、私の考えだが長かった野生時代に、特に敏捷でもなく、爪・蹄・角・牙といった強力な武器を持たない無防備の肉体が、強力な天敵といつも対峙しなければならなかったからだ。人類発祥の地アフリカは、猛獣の巣窟であった。そして人口が増え、気候変動で食糧が不足し、常にライバルと奪い合いをしなければならぬ環境。(特にオスは、十分の食料をメスにプレゼントできなければ子孫を残せない)。その恐怖が、知能発達した後も、「やられる前にやっつけろ」という、先制攻撃的な防衛策に出たのが、習慣的

になり、人類に定着したのであろう。現在起きている犯罪や戦争を起こす心理の根源は、長かった野生時代の生活習慣が、「深層心理」として現代人の心の奥底に内在しているからであろう。祖先の恐怖の累積が、現代人の心に、病理として残る。

さて、太陽系第3惑星「地球」には、このようにして生命が誕生し、大して利口ではないが一応「知的生物」といわれる人類も誕生した。それは、他の天体にも知的生物(エイリアン)が誕生しているのであろうか？

地球は太陽との距離関係や質量・大きさなどが、もう少し違っていたら、生命誕生は無理であつたらしい。地球の双子星といわれる、すぐ内隣の金星でさえ灼熱の惑星(470℃、90気圧、CO₂95%)であり、とても生物は住めない。地球の外側の火星は質量が小さく、大気など止め置くことができず気圧は超低く、昼夜の温度差が100℃もある。

地球の平均気温14℃は、生命誕生・維持に最も適していた。水も気体・液体・個体の3態をなす。もし地球の質量が、もう少し小さかったなら、大気や水蒸気を止め置くことができず、宇宙空間に逃げていく。生命誕生はとても無理だ。

地球は、生命誕生のギリギリの大きさといわれる。大きさの方は、地球の数倍までなら、生命誕生は可能といわれる。しかし質量が、何十倍も大きかったら、生命の基本元素「炭素」は、その星の強力な重力で圧縮され、ダイヤモンドだらけで、鈴木博士(2010年ノーベル化学賞)らのクロスカップリングを応用しても、有機化合物はできず、生命誕生には至らない。全身がダイヤモンドできた透明人間など、SF小説にも出てこない。

とにかく生命が誕生し、永続するためには、地

表元素の構成や大気が安定し、地表温度が、永続安定しなければならない。地質学的活発性が、生命持続安定に不可欠だ。現在の地球の温度は地球創世期の天体が衝突した熱の名残と、マントル内の放射性元素(ウラン・トリウムなど)の崩壊による熱の対流によるものだ。この対流により内部の熱は表面に供給され、冷えれば内部に沈みこみ、熱を蓄え、再び上昇して表面に熱を供給する。この恒常性が生命の永続性を維持している。地球表面の地殻は、マントルの対流により、離合集散を繰り返す(大陸移動説)。インド亜大陸は、オーストラリア方面から、ユーラシア大陸に流れ着いて衝突し、その圧力でヒマラヤ山脈ができた。伊豆半島も、太平洋を流れてきて、静岡県に衝突したのと同様、ハワイ諸島が日本列島に衝突してくる(年に数cm接近)のも時間の問題。茨城県ハワイ郡ホノルル村：なんてことも。

さて冗談はともかく、太陽系の8個の惑星のうち、岩石惑星で一番大きな地球に色々な条件が揃い、生命が誕生した。宇宙には、ほぼ1千億個の「銀河」があり、その一つが我々の住む天の川銀河である。天の川銀河にはほぼ1千億個の「恒星」があり、我が太陽と地球のような関係、即ち「生命が誕生しうる惑星」は、少なくとも100万個はありと推定されている。100万個もの惑星に生命が誕生していれば、知的進化をとげ、当然この地球より100万年や1000万年ぐらい文明が先行する惑星があってもおかしくない。地球人よりはるかに知能の進んだ宇宙人がいてもおかしくない。

現に世界の各研究機関は、太陽系外で、惑星を2010年7月末までに、461個発見している。木星級の巨大なガス惑星が多いが、地球タイプの岩石惑

星も次々発見されている。2005年には、みずがめ座のグリーゼ876という恒星を周回する「GJ876d」という岩石型惑星が発見されている。一般に系外惑星は、その星の大きさ、質量、構成元素など、まだ明確ではないが、主星の前を通過する惑星により、主星が減光したり、ゆらめきがあったりする。昔は宇宙人の存在は、単なる夢物語であったが、このように、生命が居住可能な系外惑星の存在は、大分明確になってきた。

もしこれらの星に、知的生命が存在し、文明の進歩も著しく、宇宙を移動するほどの機械文明が発達しているとすれば、その通信手段として電波を使用しないわけはない。しかし、NASAなど懸念の探索にもかかわらず、宇宙からの人工的な電波は、一切傍受できないという。(勿論、UFOなど飛来の事実はある)。ということは、知的生物は、母星を飛び立つような不遜な行為は自粛するか、或いはそれほどの文明が発展する頃には、「種の寿命」が尽きるか、どちらかであろう。

我が地球人よ！ 奢るななれ！ 生命誕生以来、嘗々と続けてきたこの命の絆。21世紀を迎え、文明は頂点に近いところまで発展したが、本質的な人類の品格など、お世辞にも、崇高なものとは言えない。明日にも崩れそうな、もろさを感じる。チョット躓けば、足元から崩れそう。私が一番恐ろしく思うのは、病原菌が強毒性を増し、牙をむいて襲いかかって来る可能性だ。抗生物質など粗製乱造。不用意な投薬。多剤耐性菌の出現。新薬発見と耐性獲得のイタチごっこ。最後は人類がお手上げ。環境は汚染放題。資源は枯渇。(中国は、ハイテク産業に重要なレアアース《希土類》の輸

出を制限。核融合発電の燃料となる、地球には無い「ヘリウム3」を、月面に権益確保するため、「嫦娥2号」を10年10月打ちあげた。更に沿岸国でもないのに、北極海の海底資源を調べ上げ、権益を主張している。)

人口過剰は、コントロールが効かず。世界各国が疑心暗鬼で、大量破壊兵器の開発に躍起。国連は機能を果たしていない。小国は生き延びようとして、窮鼠猫を噛む。前世紀の遺物のようなモンスターが、権力に執着する。気候変動や巨大な自然災害(火山噴火など)でも連発しようものなら、人類の未来は、風前の灯火だ。

人類に智慧というものが本当にあるのなら、い加減この辺で目を覚まし、我々の子孫が安心して暮らせる環境作りに邁進すべきだ。地球汚染の進行に、敢然と歯止めをかけるべきだ。人類が絶滅危惧種のリストに載らないためにも！

・不況など どこ吹く風の 秋祭り
・もの書いて 己のバカを さくらけ出し

きっかけをつくってあげよう 伊東弓子

初夏の頃とても気になることに交わした。知り合いの娘が一匹の蜘蛛を怖がって大騒ぎしている様子に、私の方が驚いた。落ち着かせる為に話をしてもなかなか聞く耳を持たずとしなかった。又近所の子にザリガニと蝸牛をあげにいった。四つの子は喜んで出てきたが、お母さんがザリガニを怖がって受け取ろうとしない。三日

後取りにくる事を話して戻ってきた。子供は興味をしめしてくれたから「よし」と親切の押し売りをして帰ってきたのだった。

これから育っていく子供や、その母親になる娘が生き物にどう対処していくのかと気に係った。毎日姿を消していく動植物の種類がここ近年多くなった話しを耳にする。環境を考えねば…と必死に対策を講じようとしても身の周りの動植物を知らなかったり、無関心では良い知恵も浮かぶ筈がない。動植物と人がバランスを保っていつてこそ良い環境であり、その中でこそ人間の生活は安定すると思う。先ず大人達が確り意識して欲しいが、固まってしまった大人よりも、子供達に気づいて貰おうと思う。身の回りの動植物(他も含め)に目を向け、手に取り、観察する気持ちを持ってやる。な「きっかけ」を作ってやろう。そこから生きている実感やお互いの生命を理解出来るようになると思う。子供達と私の係りの中から育てていこう。

鶯の谷津わたりと共に自然界の生命の活動が始まった頃、きくちゃんは小学校へ入学した。遠い道を通うきくちゃんを送りたいと思い、気づかれないように反対側の歩道を自転車を押していた。上級生が気がついて挨拶をしてくれた。みつかってしまった。挨拶を返すときくちゃんも気がついて、「ばあちゃん、いつ来たの」と笑顔で言ってくれた。そんな遣り取りの中に私の存在も満更でもないと思ふながら、隠れるように歩いてきたを恥ずかしく思った。左右の歩道を子供達と歩くのも同じテンポで回る荷車の輪のように足も軽く気持ちよかった。そんな時、

「何か轆かされてるよ」

私寄りの車道に茶色っぽい物が見えた。子供達の足も止まって一点を凝視している。それは野兎だった。

「あ、動いてるよ」

私より遠い所にいる子供達が見つけた。赤子が三四、その中の一匹が動いていたのだ。

「可哀想、死んじゃうかな」

「お母さんが死んじゃったからね」

と話ししながら動こうとしない。あとは引き受け、安心させて学校へ向かわせた。現場に近い家に駆け込み、若いお母さんの協力を得て、葬り、赤子は保健所に連絡してくれる事になった。その後、私は用のため土浦へ向かった。帰り次第そのお宅に寄って供養の団子を頂きながら報告を聞いた。保険所の人に来て動物病院へ連れて行ってくれたそうだ。元気になったら自然に（轢かれていた近くの山野へ）戻すという事だった。その事を集団登校のリーダーに伝えて皆に安心して貰うよう頼んだ。母兎は春の訪ずれに子を産む場所から出て来た所か、空腹を満たすのに草を求めて走ったのか、哀れだ。一つの生命が残った事を目にして、子供達は希望を見たことだろう。一ヶ月後聞い合わせると赤子は死んだという。又リーダーに話し皆に伝えて貰うよう頼んだ。子供達は現実を目のあたりして、何を感じたことだろう。この出来事を通して心を育てる糧にして欲しいと願っている。

時鳥の忙しい鳴き声から蝉の大合唱に移った。暑さと病院通いの疲れをとり除いてくれたのは、きくちゃんとの遊ぶ時間だった。生き物や花、草、石、木でドラマを作る楽しさだった。蚊に眼を妨げられたが蠅の姿は殆ど見なかった。天水

桶に金魚が一匹と数えきれない程の子子が同居している。そこへ時々鳥が来て水を飲んでる。二人で陰から見られていたが、私の心配は金魚が浮んで来た所を食べられてしまうのじゃないかというおもう。でもきくちゃんは、

「お話ししてるのかな。仲良しになるのかな」

と想像を巡らしている。野菜屑を突く鳥も陰からじつと観察、蝸牛の鈍い動きも蟻の忙しい動きもすべて興味の対象となる。裏山から野良猫が投げた骨を食べにくる様子も淋しい老人と好奇心の旺盛な孫にとつて大歓迎の訪問者だ。

夏休みが過ぎて学校が始まると、空気まで止まって淀んだみたいだった。車の過ぎる勢いその淀みが飛び散っていく。そこに夏の忘れ物があった。おにやんまの格好よい羽根もバランスを失ない傾いてしまった。かげろうが重そうな羽根を重ねて横たわっている。蜂もあのいきおいのよさはどこへいってしまっただか。蜘蛛のあの細い糸を巧みに操っていた手足は曲がって堅くなっている。紋白蝶は純白を誇っていた羽根にも埃が溜まっているようだ。玉虫は手足は筆でも羽根は燦然と光を放っている。玉虫の厨子の話しをしながらきくちゃんと過ごした楽しい夏の扉を閉じた。蝉時雨も夏のそれとは違って初秋の物寂しさに変わっていった。一人で聞くのも勿体ない。この大合唱を子供達は聞いているだろうか。テレビを見る前に外に出てみてと電話した。

晩秋に入ると催しものも多い。産業祭に歩いて行く途中沢山の出合いがあった。里山も谷津田も色づき出した。水田には二度めの稲が伸びて穂も頭を垂れて、あちこちに黄金の小波が漂っている。畔の小さな花の影からいなご、蜘蛛が出てくる。

とびだした殿様ばったがとても大きく見えた。子供達は追いかける。細い道端にかまきりや蛇が轢かれていた状況が目に入った。小寒くなつて動きが鈍くなった為に轢かれたか。

「嫌がらずによく見てね」

「おとむらいはお婆ちゃん！」

その声に答えて道端に埋る役目を果たす、その間一緒に見せておきながら一休みをした。短い山道で何度休んだ事か。谷津田の水源近くでは赤とんぼが群をなして飛んでいた。登り坂下り坂よく歩いた。大人が簡単に遠いから疲れるからというのは禁物、それ以上に発見や出合いの楽しさの方が子供達には大切なことを大人が解って欲しい。

夜露が増えてくると虫の音色も種類が少なくなった。そして宵毎にか細くなった。最後迄残った羽音は何の虫だったろう。

とうとう冬がきた。病院の庭できくちゃんが木登りをしている。蝉の脱け殻が沢山あるよ。とつてもきれいだと言をかけてくる。

「ほら、ここ透きとおっている。背中割れめも壊れていないよ。きれいに切れている」

と言ってみせてくれた。もう一本の木には糞虫が沢山ぶら下がっていた。私も登りやすい枝に足をかけて上り、同じ様に出来る体力に少しばかりの自信を持った午後だった。送ってもらった一人の部屋に灯をつけた。蜘蛛の家も空き家になって揺れるだけ家主もいなくてやがて崩れていくことだろう。蝸牛の住居も借人もなく風に転がっているが、踏れて壊れるのだろう。我家にはごきぶり鼠が同居しているが、未だかまどうまの姿をみてない。いつでてくるのだろう。訪れる者も少なくなったが来年また合えるだろう。

子供とも拘りの中で感じたものは、子供達は決して動植物を嫌がってはいない。むしろ興味でいっぱいだ。それに気づかず、触れることなく過ぎてしまう方が多いということだった。「忙しい」という言葉を使い過ぎて、その忙しさに甘えて大切な物を置き忘れてしまっている。父母が忙しければ爺さん婆さんがその役をやっつけていこうと自分の存在をPRしたい。外に出て季節や天候、動植物、さまざまな存在の中で子供達が感じていくものを貯蓄して欲しい。

その「きっかけ」づくりをしよう。来年ひとつづつ大きくなる子供達と巡って歩きながら私も楽しませてもらう。

ああ来る年が待ちどおし昨年。

黒いカラス

小林幸枝

ギター文化館の喫茶室から眺める山々は、季節を問わずその美しい姿には心が安らぎます。紅葉に染まった山々が夕陽に照らされた時の美しさは本物の常世の里、まほろばの里はここに違いないと思ってしまう。

夕暮れ近くになると、ギター文化館隣りの柿の木に黒いカラス達が集まり、陽が落ちる少し前まで「お話し会?」「情報交換会?」それとも何かの「ミーティング?」をしているようです。私が帰る時間にはもう姿が見えませんが、巢に戻る前の僅かな時間の会合の様です。

野鳥の中でカラス程利口で学習能力の高い鳥はいないと言います。その通りの事を見てびっくり

した。朝、ギター文化館の駐車場に入る時、カラスが道に何かを落して行くのを見た。車が通り、落した何かを轢いて割ったと思ったら、カラスが素早く降りてきて欠片を啄ばんだ。そしてまた何かを落して行った。私はそれを轢かないで避けて駐車場に車を入れたら、カラスは怒ったように羽をばたつかせてとび跳ねた。私は「割ってなんかあげませんよ」とあかんべーをしてやりました。でもカラスは意地悪をされたら、覚えていてその人に仕返しをしようと聞いたことがあります。それで心配になって昼に車を見に行ったら、何となく糞をさされたりの悪戯はされていなかった。

次の日、道に猫が轢かれて死んでいたので、カラスがその肉を突つついて食べていた。それを見て、11月の公演の舞い歌のなかに「雑木林に行き倒れて、この脳みそをカラスどもに突つつかれて終えてしまうのです」という箇所があった。

私のカラスにした意地悪を知って、車を下りた瞬間、頭を突つかれたりしないだろうかと急に心配になった。もうカラスに意地悪しないようにしようと思つた。黒いカラスは、本当に利口なのです。

平城遷都一三〇〇年

兼平ちえこ

今から一三〇〇年前に日本の国造りに懸命な人々がいた。

聖武天皇に光明皇后、長屋王に藤原一族、粟田真人がいて吉備真備もいた。遙か唐からは阿部仲磨呂や井真成。そして、その時代には、この石岡の地にも常陸国の中心として先人達の懸命に生き

た証が伝えられている。

和銅三年(七一〇)三月十日、藤原京から平城京への遷都が行われた。今年は一三〇〇年の記念の年になり四月二十五日〜十一月七日まで様々な展示や催事が盛大に行われていた。

石岡に常陸国の国府が置かれた時代、日本の都(首都)であった奈良に行ってみたい念願の旅は、最終間近の十一月二、三、四日叶うことが出来た。

石岡駅始発で、十一時頃には奈良に到着。JR奈良駅前からは無料のシャトルバスが数分毎に発車して、そこかしこに案内の方がおり、奈良の意気込みが感じられた。一五分ほどで記念祭の会場、平城宮跡に到着。

復原された朱塗りの朱雀門が迎えてくれた。その朱雀門の近くには遣唐使船が再現され、古代の国際交流の様子が感じられた。

その遣唐使資料館の前は長蛇の列。

この広い平城宮跡をどのように見学したらいいのか。幸いに平城宮跡ガイドツアー申込が一時間待ちであったので、昼食をとりながらの嬉しい待ち時間となり、間もなく二十五人の見学ツアーの中に入る。

南北約五km、東西約六km、一三〇ヘクタール(甲子園球場三四個分)の平城京には中央北端に政治の中心となる平城宮が、約一km四方の広さで、大極殿や朝堂院などの宮殿のほか、天皇の住まいである内裏があり、周囲には国の役所が立ち並んでいたと言う。

平城宮の正門「朱雀門」

四神と呼ばれる、天の四方を守る神のうち、南を守る神、朱雀に由来している朱雀門は、平成十年に築地塀の一部と共に復原され、間口二五m、奥

行き一〇m、高さ二二m、二重の屋根で聳えつつ
ていた。

古代の朱雀門は築地塀で囲まれた平城宮には一二
の門がありその中でも特に立派に造られていたと
言う。

第一朝堂院

役人が整列する場所であり、執務のほかさまざま
な儀式にも使われていた。

南門広場

記念祭に合わせ、大極殿の前に整備された広場で
西側に天平の衣装の貸出所があり、親子、カップ
ル、婦人のグループ、皆さん思い思いの天平衣装
を身につけ楽しんでた。

第一次大極殿

復原に際しては発掘調査のデータや現在残ってい
る奈良時代の建物等参考に多くの専門家が研究し
て二〇〇一から工事に着手し、七一〇年の平城遷
都から丁度一三〇〇年後の二〇一〇年に完成（間
口四四m、奥行き二〇m、屋根の高さ二七m）。

即位の儀式や元日の朝賀におかれた天皇の玉座
である「高御座」と共に、息を飲むほどの美と壮
大さを誇り、いにしえの人々を懐かしみながら華
やいでいた。

（ここで、一時間半のガイドツアーは終了となっ
た。

奈良時代の後期に用いられた第二次大極殿の基
壇の復原。北にある天皇の住まいの内裏の復原。
発掘調査で見つかった遺構をそのまま見ることが
できる展示館。天皇が開く宴会が催された所と考
えられている平城宮の東南の端にあった東院庭園
半日では到底見きれない程の広さであった。

平城京に都が造られてから一三〇〇年。かつて

の都は田はたに変わり、長い眠りの中にいた。そ
こに再び光があてられたのは一五〇年前のことで、
さらに昭和三十四年から、平城京跡の本格的な発
掘が始まり、五十年。

平城宮跡の田はたの地下から出土した遺物、中
でも木簡（文字や絵が記された木片）は、言葉を持つ
遺物として大きな威力を持ち、無言の遺跡が、無
言の遺物が、言葉を持って語り始めたそうです。

次の日は見学できなかった所と復原された大
極殿近くの平城宮跡資料館にてドキドキするよう
な木簡にお会いしたのでした。この胸の高鳴りは、
新しい年にお伝えしたいと思います。

また今年もあつと言う間の一年間のご愛読の御
礼となりました。相変わらずの稚拙な文を目に入
れて頂き有難うございました。

来年も今年より更に、お健やかに、輝かしい年
であります様に。

参考資料 平城遷都一三〇〇年記念 平城京

- ・さざんか一輪風に遊ぶ
- ・さいたさいた柿の実さいた

ちえこ

《ふる》の》

ピザ・パスタ・アレンジ蕎麦・蕎麦会席料理の
お店です（ギター文化館通り）

看板娘（犬）「うらら」ちゃんが
皆さんをお迎えいたします。

電話0299・43・6888

ギター文化館

CONCERT SERIES

2010年も最後のコンサートとなりました。

12月12日（日）PM3:00～角圭司 ギターリサイタル

2011年のCONCERT SERIESも、より一層
の充実を図ってお届けいたします。宜しくご声援お願い申
上げます。

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35

☎ 0299-46-2457

Fax 0299-46-2628

工房オカリナアートJOY

母なる大地の音を自分の手で紡ぎ出
してみませんか。

あなたの家の庭の土で・・・

また大好きな雑木林に一掴みの土を
分けてもらい、自分の風の声を

「ふるさとの風景」に唄ってみませんか。

オカリナの製作

オカリナ演奏に興味をお持ちの方、

連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜 2465

TEL0299-55-4411

打田昇三訳「平家物語」

「ことば座」公演の際に兼平良雄さんが生涯学習として平家物語(原文)の朗読に挑戦され、既に幾つかの章段を読破されました。その御努力に敬意を表し、且つは拝聴した朗読を忘れないために、自分で出来る範囲のことを考えて勝手に意識してみました。私的な感想が入っているので、意味が大きく違わないように用語などを選んだつもりですが、間違いがあればご指摘を頂ければ幸いです。是までに兼平さんが朗読された後を追いつ、その章段を書いてゆくつもりです。なお、原文などは大正時代に博文館が出版した「平家物語」に依っています。

平家物語 巻第一・第一句「殿上の闇討」

序(祇園精舎)

名前を聞いただけだと芸妓の組合と間違われそうだが「祇園精舎(ぎおんしょうじや)」とは、「祇園給孤独園(ぎじゆぎつこどくおん)」のことで、祇園太子(ぎだたいし)と呼ばれた釈迦の為に給孤独(ぎつこどく)こと須達長者(しゆだちやうじや)が買い求めてくれた土地に建てられたという仏教教団最初の道場のことである。

当時、その土地は一面の樹林であり、釈迦と同じような小王国の王子ジェーダが地主であった。欲深いジェーダは「金貨を敷きつめた分だけは売ってやる」と言ったので須達長者は言われたとおりにしたらしい。樹林ならば木の分が減るから思ったよりは広い土地が得られたのかも知れない。ネパールに近い印度北部の田舎町バルランプール

郊外に「サヘトの遺跡公園」として現存し公開されている。道場の最盛期には塔、僧院、釈迦の住居、説法所、客殿などが立ち並ぶ壮大な施設であったが、そこで撞かれた鐘の響きは「諸行無常」と聞こえたのである。現地に伝わる「強欲な地主と金貨の話」も諸行無常を暗示している。

そして、釈迦が入滅した際に周囲に植林された沙羅(しゃら)の木は、その半分が枯れたと言われるけれども、林の四隅(東西南北)だけが二株一本になって育ち「沙羅雙樹(さらしやうじゆ)」と呼ばれる。沙羅雙樹に咲く花は「高遠」を表わすのだが、これも他の植物の花と異ならず、盛りを過ぎれば萎れて落ちて朽ち果ててゆく。

これと同じで、人間社会でも驕り高ぶる者の時代は長く続かない。春の夜の夢のように儚く(はかなく)、勢力を誇っていた者も遂には亡び去ってしまうのである。これを譬えれば、正に「風の前の塵埃(ちり)」に同じであつて、遠く異国のことを見ても次のような例がある。(注:平家物語が書かれた時代の日本では「異国」が中国しかないから、中国の話になっている)

まず「秦(しん)の趙高(ちやうこう)」は始皇帝に仕えた宦官(かんがん)去勢された家臣)であつたが、皇帝から皇太子に宛てた遺言書を預かつたのを悪用し、遺言を偽造して別な王を立て権力を握つたが、やがて自分もその王に殺された。

また「漢の王莽(おうもう)」は前皇后の親族の立場を利用して王を殺し、自分で新の国を建てたが過酷な政治で各地に反乱が起き、滅ぼされた。

「梁(りやう)の周伊(侯景)」は北魏(ほくぎ)の武将でありながら梁に帰属して祖国を滅亡させた武将である。南京を攻略して国を立ててが、程な

く戦いに敗れた。(侯景の乱の首謀者)

そして、「唐の禄山」は、かの楊貴妃と玄宗皇帝の悲話の原因となった反乱首謀者の一人「安禄山」である。唐の外交官の使用人から身を起し、皇帝に取り入って高官となり、背いて王位を奪い「大燕国」を建てたが、後継ぎ問題で息子に殺された。

これらの例は、いずれも全て自分の主君や王に背いて権力を奪い、そうかと言って良い政治をした訳ではなく自分たちの栄耀豪華のためだけに政治を行った。他人の諫め(いさめ)も聞かず、世の中が乱れることも悟らずに、国民の苦しむことにも耳を貸そうとはしなかった。その為に、長く権力を保つことが出来ずに滅びた連中である。

これを日本の国内に当てはめて見れば、まず、承平年間に起こった平将門の反乱に始まり、天慶年間に西国で海賊として暴れた藤原純友、康和年間に地方で政府に背いた源義親、そして平治の乱の首謀者である藤原信頼がいる。彼らは、思ひ上がった傲慢さや、邪悪な心など謀反を起こした動機がそれぞれに違っていたかも知れないが、結局は権力に対する欲望から身を滅ぼしたのである。

平将門は一族内の争いに勝つて自分の力を過信し武士の統領になろうとしたのだが、敵の存在に気付かず平貞盛と藤原秀郷に討たれた。藤原純友は初め役人として海賊退治をしていたが、海賊のほうが増えるので立場を変えたために官軍に追討された。また八幡太郎義家の次男である源義親は、地方国司在任中に都へ収める税(品物)の送り先を自分の屋敷に変えて免職になり、隠岐の島に流されたが脱出して出雲国などの国府を襲って暴れ最後には平正盛(忠盛の父)に誅罰された。藤原信頼は、後白河上皇に目をかけられたのを良いことに

官職へのさらなる野望を抱いてライバルの藤原信西を蹴落とそうとして「平治の乱」を起こしたのだが、平清盛に負けてしまった。

その清盛が、やがて六波羅の入道・前太政大臣平朝臣清盛公（ろくはらのにゅうどう、さきのだじょうだいじん、たいらのあそん・きよもりこう）などと呼ばれ、他人も羨（うらや）む栄耀栄華を極めたけれども結局は一代で終わってしまった。その繁栄について伝え聞く話は誠に壮大であり、また没落の様子が余りにも極端であるため、それを言葉では言い尽くせない程である。

平清盛は出家して入道を号し、六波羅の地に豪壮な館を置いて権力の中心地としたので「六波羅の入道」と呼ばれる。京都の東山山麓、鴨川の東側、五条と七条との間の地域が六波羅であるが、「六波羅」と言えば平家を指すようになり、人々に怖れられるようになった。

清盛の先祖は桓武天皇の第五皇子・一品式部卿（いっぽんしきぶきょう）葛原親王である。ゆえに「桓武平氏」と呼ばれる。「一品」は皇族の最高位であり、「式部卿」は現在の文部大臣、人事院総裁、法制局長官に当る。清盛は葛原親王から九代の後胤になる讃岐守（香川県知事）正盛の孫で、刑部卿（ぎょうぶきょう）法務大臣を務めた忠盛朝臣の嫡男である。「朝臣」は敬称であり、別に早起きだった訳ではない。

葛原親王の子・高槻王は官位官職を受けることもなく若くして亡くなり、其の子・高望王（たかもちのおおきみ）の時に「平」の姓を貰って上総介（かずさのすけ・千葉県副知事）に任命された。その時に高望王は皇族の籍を離れ、臣下になって地方へ下ったのである。高望王の子・国香から正盛に至るま

での六代は「受領（ずりょう）」と言い、地方の県知事などに任命される中級公務員であるから公家（くげ）の仲間に入れず宮殿への出入りは許されていないかった。

忠盛昇殿 殿上の闇討

平氏一門は、そう言う身分なのだが「受領」は一般に金持ちであった。なぜかと言えば、現代の天下り法人の長と同じで、職務に旨みがあった。地方に居て一国の主であるから、都へは税さえ送ってれば、後は自分の裁量次第で冬でも懐が火傷するほど暖かくなる。豊かな国の国司を何年か勤めれば財産が溜まる。それを偉い人の関心を買うために投資するのである。

平忠盛は情報網を挿んで、その頃に鳥羽上皇が大きな寺院を建立したがっていることを知った。建立の目的は、自分だけ極楽往生をしようという願望である。しかし、上皇でも懐具合は良くない。

平忠盛は財力に物を言わせ、あれよあれよと言う間に「得長寿院（とくちようじゅいん）」を建立し、後に通し矢で有名になる「三十三間堂」までオマケに付けて、それを鳥羽上皇の名で寄進したのである。贈与税がどうなったかは知らない。そこに納めた仏像だけでも一千一体もあり、天承元年（一一三二）二月十三日には鳥羽上皇の名で盛大な供養が行われた。この寺は後に後白河法皇が発願し平清盛が蓮華王院を併合増進した寺として今は天台宗に属し京都市東山区に在る。

勿論、鳥羽上皇が喜ばない筈はない。一説では、平忠盛が工事の総監督をした功績と言われるが、鳥羽上皇の喜び方から見れば単に現場監督の功だけでは無い。現代の政治資金ではないが、札束は

〇〇屋敷から密かに運ばれた説をとりた。當時は崇徳天皇の治世であるが、父親の鳥羽上皇が院政を布いて政治の実権を握っていた。

鳥羽上皇は忠盛への褒美として何処かの国守に欠員が生じた場合に任官することとし、丁度、但馬国（京都府北部）が空いたので忠盛は直ちに但馬守に任命された。嬉しくてしかたがない上皇はさらに、忠盛への礼として官位を上げ、宮中への出入りを許した。破格の扱いで平忠盛は三十六歳で初めて昇殿することが許された。

これに対して在来の公家どもが猛反発をした。妬み（ねたみ）が半分、蔑（さげすみ）の心が半分で憤慨をしたのである。自分たちを特別な人間だと錯覚している公家どもにとっては、格下に位置付けられていた武士階層の忠盛が急に昇殿を許され、そいつと自分たちが同席することに何とも我慢がならない。

そこで同じ年の十一月二十三日に行われる「五節豊明の節会（ごせちとよあかりのせちご）」に忠盛を闇討ちにしようという恐ろしい計画が組まれた。この行事は、天皇が新米を試食する新嘗祭（にいなめさい）翌日の晩に宮中で行われる宴会であり「公家たちの下手な舞いを天皇が見る」という、どうでも良い様な催しである。どちらかと言えば無礼講のようなもので、天皇の前ではあるが座が乱れるから、その時の混乱に乗じて「忠盛を闇討ちにしよう」と決めたのである。

宮殿内で物騒な計画が簡単に決まる…何とも乱れた社会であるが、当時の天皇家は白河上皇がボスで堀河、鳥羽、崇徳、近衛の各天皇が幼稚園又は小学校に在学中に次々と即位した。それらの対立が、やがて「保元、平治の乱」を惹き起こす。

忠盛を引き立てた鳥羽天皇は堀河天皇の嫡男であるが五歳で父帝に死なれて即位した。しかし祖父の白河上皇が強力な院政を布いていたから、二十年程はお飾りで過ぎ、その間に祖父の命令で息子の崇徳天皇に譲位させられた。

平忠盛が鳥羽上皇に接近する頃に、白河上皇がやつと此の世から消えて鳥羽上皇の時代が来た。つまり崇徳天皇の上に鳥羽上皇が居て、平忠盛は鳥羽上皇の引き立てで崇徳天皇の宮殿に入りを許されたのであるから、それも公家どもの気に入らない理由である。

それにしても宮殿内で堂々と暗殺計画が組まれるなど呆れた話で、日本も国家の中樞が腐っていたことになる。それはともかく、公家たちが企んだ実にいい加減な計画は、すぐに漏れて忠盛の耳に入った。或いは鳥羽上皇派の公家が居て教えてくれたのかも知れない。

これを聞いた忠盛は呆れながら考えた―平氏は文官ではない。自分も武士の家に生まれて思い掛けないことで闇討ちなどされては家の恥、身の恥である。そうかと言って当日に欠席するのも腹立たしい。武士の社会では「自分の身を全うして最後まで主君に仕えるのが忠臣である」と言われているから、此処はそれなりの準備をして対応しなければ：そこであれこれと用意をしてから暗殺計画など全く知らぬふりをして宮中へ出かけた。

参内の夜には長めの短刀を持ち、それをだらしなく着た装束の腰に差し、他人からは良く見えるようにして、わざと篝火の近くに寄って暗闇に向かい、その短刀を自分の鬢(髪)に当てて見せた。陰から忠盛の様子を見ている公家たちには、それが氷の刃のように見えて何とも恐ろしく、とても

闇討ちなど出来そうもなくなった。

一方、忠盛の家臣で元は平氏一門であった平木工助貞光(たいらちもくのすけさだみつ)の孫で、新二郎大夫家房の子・左兵衛尉家貞(さひょうえのじよういへさだ)と言う者が、武士の制服である狩衣(かりぎぬ)姿で派手な色の腹巻を身に着け櫛袋(つかぶくろ)を付けた俣ではあるが大太刀を、しっかりと

身体に密着させ宮殿近くの小庭に畏まっているのが分かった。それを見つけたのは、天皇の側近中の側近である「蔵人(くらんど)」で暗殺計画には関与していないから、何事かと不審に思い、貫主(かんじゅ)と呼ばれる蔵人の頭(長)以下が見とがめて六位の者に退去を命じさせた。其の程度のことでは自分ですれば良いのだが何しろ格式が大事な社会であるから殿上の奉仕は五位以上の者しか出来ない。そこで飛行場ではないが地上勤務の六位の役人に命じて怪しい奴を退去させようとした。六位という地位は中小クラスの国司と同じである。一般には「舍人(とねり)」と呼ばれて宮殿に上がれないから庭の辺りで雑用をしている役人である。その者に退去を命じさせたのである。

現場に行った舎人は、相手が強そうなので尻(こ)みしながら少し離れた場所から怒鳴った。「うつぼ柱は殿上から直ちに退去せよ！」

うつぼ柱は殿上の階段の傍にある雨樋を隠すための柱であり、内綱は蔵人が部下の舎人などを呼ぶ為の鈴に付けた綱である。舎人の呼び掛けに対して、左兵衛尉家貞は「うるさい奴らだ！」と思

いながらも、一応は恐縮した様子で丁重に、しかし頑固に答えた。

「：私の祖先からの主君である備前守殿(平忠盛のこと、但馬守から備前守に替わっていた)が、今夜、何者かに闇討ちにされると聞いたので家臣として其の様子を確かめるために此処に居るのです。怪しい者ではありませんが、私も目的があるので、此処を動くことは出来ません：」畏まった態度であるが一步も動こうとはしなかった。舎人のほうでも、傍まで行って追い出すことなど思いも寄らず、諦めて遠くから様子を見ているほかはない。それやこれやで公家どもは平忠盛を闇討ちになどすることも出来ず、計画が漏れていることも分かって、その夜の暗殺は中止になった。

それでも公家たちの悪意は止むことなく、その夜に忠盛が宴席で舞いを披露した際には、わざと拍子を変えて「伊勢瓶子(へいし)は素瓶(すがめ)なりけり」と囃した。伊勢国の産物に素瓶という一般用の高級ではない瓶(かめ)があり、忠盛が「眇(すがめ)斜視」であったことにかけて侮蔑(ぶべつ)したのである。忠盛は殿中のことなので、その場は我慢をして、行事が未だ終わらないうちに、公家どもを睨みつけるようにしてさつさと席をはずした。

その時に宮中の正殿である紫宸殿後方の、他の公家どもからも見える場所にわざと立ち止まり、自分が持っていた短刀を主殿司(とものつかさ)と呼ばれる女官に預けてから外に出た。主殿司は宮中で日常のこまかな仕事を行う女官であるから美人を集めたらしく、華美に流れたというが天皇、皇后などの身近に接する。公家も気安くは近づけないから預け先としては安全な場所である。

待ちうけていた家貞が心配顔で駆け寄り「いか
がでしたか、何事かございしましたか」と尋ねた。
忠盛は言いたいが山程に有ったのだが、それ
を言えば家貞は天皇の居る殿上までも駆け上つて
公家どもを斬りかねない勢いであつたから「別に
心配することも無かつた」と答えて、その場を
済ませたのである。

「豊明の節会」など五節の行事には舞手の衣裳
とか舞の様を道具などに例えて、優雅風流な趣味
のことを話題にして歌を詠み舞を舞うのが本来な
のであるが、墮落した公家たちは他人の欠点など
をあげつらつて馬鹿騒ぎをしたがるようになって
しまったのである。以前に有つたことだが、九州
防衛の責任者で正三位の太宰権帥季仲卿（ださいの
ごんのそつすえなかきょう）という肌の色が黒い人物が
居り、他の公家たちは「黒帥（くろそ）」と仇名し
ていた。この季仲卿が蔵人頭で居た頃に、天皇の
前で舞いを舞つた。公家たちは是を見て「何と黒
い頭かな、誰が漆（黒漆）を塗つたのであろう…」
などと囃し（はやし）立てた。

また花山院の前太政大臣忠雅公（かざんいんのさき
のだじょうだいじんただまさこう）花山天皇時代の大臣は、
十歳で父親の中納言に先立たれて後見者を失つた。
それを当時は播磨守であつた家成卿（後に中納言が
自分の家の婿にして華やかに守り育てた。そのこ
とを五節の宴で公家たちが取り上げて囃したこと
がある。

「播磨の米は木賊草（とくさ）木・竹などを磨
くに用いた）か棕の葉（細工物を磨いた）か、他
人の綺羅（きら）を磨いている…」

綺羅とは絹織物の上等なものを言い、其処から
転じて出世や栄耀榮華を指す。この場合は、他人

の子を養つて栄達の手助けをしている播磨守を皮
肉つているのである。

公家の品位が低下して宮中で行われた宴会など
では、こういうことが多かつたけれども、笑ひ者
にされた公家がじつと我慢をして特に問題も起こ
らなかつたようであるが、世の中が殺伐としてき
た今の時代はどうであろうか―特に今回の平忠盛
については暗殺計画まで浮上している。何か起こ
らなければ良いが…と心ある人が案じていた。

忠盛申しひらき

その予感が的中し（この場合は暗殺に失敗した公家ども
の悔しさが高じてだが…）五節の行事が終つた後に公
家や殿上人が揃つて崇徳天皇の許に平忠盛の行動
を訴へ出たのである。その言い分（訴状の内容）は次
のようなものであつた。

「剣（武器）を持つて公式の宴席に列したり、或
いは武装した家臣を供にして宮中に入出入りするこ
とは、格式を守るために天皇の命に依る儀仗の場
合などに限られるという規約がある。それなのに、
平忠盛は年来の郎従と称する怪しい者を殿上の小
庭に控えさせたり、自分では太刀を横差しにして
（隠し持つようにして）五節の宴に加わつた。このよう
な所業は今までに無い狼藉である。違反事項が重
なつているのでその罪は免れ難い。すみやかに昇
殿資格者の名簿から削り、官位を止め、懲戒処分
として厳罰に処すべきである…」

このことを知つた鳥羽上皇は大いに驚いて直ち
に忠盛を呼びよせ事情を聞いた。忠盛は悪びれた
様子も無く、先ず、公家どもが企んだ暗殺計画に
触れてから、次のように申し開きを行つた。

「郎従の左兵衛尉家貞が殿上の小庭に待機して

いたことを、私は知りませんでした。考えられ
ることは、私が公家の皆さんに暗殺されるという
ことを知つたので、主君を護ろうとして私に内緒
で待機していたのでしよう。そう言う訳ですから、
私が止めたりは出来ません。もし、それが罪にな
るのでしたら、本人を差し出しましょうか…。次
に刀のことですが、その時の太刀は今も主殿司に
預けてありますから、ご覧になられて刀の中身を
確かめて頂き、それに基づいて罪科をお決め頂き
たいと思います…」

鳥羽上皇は「尤もな言い分である」と蔵人に命
じて主殿司から問題の太刀を取り寄せ、自ら手に
とつてみると、その太刀は鞘（さや）のほうは黒く
塗つて本物のようになっているが、中身は木刀に
銀箔を押ししたもので、キラキラ光るが太刀では無
い。それを手にとつてご覧になつた上皇は感服す
ること頻（しき）りで忠盛に言葉をかけた。

「危機に対し武士の恥辱を避けるために太刀を
持つてゐる様子を敵に示すなど、防衛の手段を講
じるのは止むを得ないとしても、後々に訴えられ
ることを見越して、木刀を身に着け、敵にはそれ
を本物の太刀のように思わせる…その周到な用意
の仕方は誠に神妙である。弓矢執る身の武士の謀
（はかりごと）は此のようであつて欲しい。また忠義
な家臣が殿中の小庭に待機してゐたのは武士の郎
党の在り方としては当然のことであり、忠盛の咎
（とが）ではない…」

こうして平忠盛は怒られるどころか鳥羽上皇か
ら褒められたので、幾ら公家どもの訴えがあつて
も天皇から罪を問われることはなかつた。

忠盛和歌 忠度の母の事

平忠盛には多くの子がいたが、主だった者は嫡男の清盛、次男の経盛、三男の教盛、四男の家盛、五男の頼盛、六男の忠重、七男の忠度であり彼らはいずれも武門の官職である近衛府、衛門府、兵衛府の將軍職を補佐する「佐（すけ）Ⅱ従五位」に任じられた。この平氏一門は父親と同じように昇殿は許されたけれども、既に平家の勢いが強くなっていたために、他の公家どもから白い目で見られるようなことはなくなっていた。

その代りに「男子が七人居れば長者」と言われた時代に七人の男児が揃って高官になった平氏への嫉妬が多くの人々の間に生じていたことは否定できない。これが後に平氏が没落する要因の一つになったことは十分に考えられる。

忠盛に対する鳥羽上皇の信任は益々厚かった。或る時には、備前守であった忠盛が任地から上京して上皇の許へ挨拶に伺った折に、上皇が「備前の国で有名な明石浦はどうであった？」と質問をした。忠盛は即座に次のような歌で答えた。

「ありあけの月も明石のうら風に波ばかりこそよると見えしか」

歌としては別に秀作とも思われぬが、明石浦を見たことが無い上皇に気を使って「波だけ…」と答えたのであろう。上皇はその心遣いに感心して、この歌を金葉集（白河法皇の命で天治元年に出来た五番目の勅撰和歌集）に入れてくれた。

また忠盛は、御所に仕える女房の一人を妻にしていた。当時は男性が複数の女性の許に通う結婚形態が普通であったから、遠慮することはないのだが、或る晩のこと、その女房の許に居た忠盛は、帰り際に扇を忘れてきてしまった。その扇は片端に月が描かれたもので、それを見た同僚の女房た

ちが「これは、何処から出てきた月なのですか？出所が分かりませんね…」とからかった。暇で好奇心旺盛な女たちは、忍んで来る相手が薄々は分かっていたながら本人の口から聞きたいのである。忠盛の相手の女性は歌で答えた。

「雲間よりただもりきたる月なればおぼろげにてはいはじとぞおもふ」

二人は共に風情のある相思相愛の男女であった。七男・忠度の母親が此の女房であり、薩摩守忠度も歌の道で知られた武将として後に名を残した。

【風の談笑室】

日の移ろいとは実に速いものである。のんびり行こうよ、なんてことを言ってみてもあつという間に一年が過ぎてしまう。この会報「ふるさと風の会」も、今月号で第55号となった。

今年一年を振り返ってみると、当「風の会」にとつては、大層充実した一年であったと思う。嬉しい励ましのお便り。また厳しいご指摘のお便りなど、有難い一年でした。

さて、今回の鈴木健さんの原稿を、会員扱いにするか、特別寄稿欄に紹介するかと迷ったのでしたが、最終的に編集室の独断で「風の談笑室」に掲載させていただくことにした。色々な意見があるだろうが、当会としては、こうした意見交換が出来ることは当初より大いに期待するところのものであったので、会報もやっとの事「こまで来た」と大喜びしている。

特別寄稿を読んで

鈴木 健

「風」第52号に、拙稿「新治筑波を過ぎて…」に対する反論がありました。自分に向けられた言葉に黙っていたのでは、相手の言い分を認めたことになるので筆を執ることにしました。

意見を頂戴できるのは望むところです。しかし、他者の説に反論するには、①相手の説が成立しない根拠を具体的にあげる。②具体的な根拠を示して自説を提示すること。が必要になります。

①がなければ単なるけちつけです。②が示されなければ空想と思われても仕方がないでしょう。この二つが欠ければ反論ではなく、攻撃になります。「古代史研究の泰斗」といわれる方でありますからそのようなことは充分承知のことでしょう。にもかかわらず、論者の文にはそのどちらも見当たらず、思わず、内容と肩書き（この場合は尻書きです）とを見比べてしまいました。

黄門さまの印籠のような力があるとしても思ったのでしょうか、壮大な尻書きを入れたのはご本人でないことは察がつきます。それがかえって先生の名譽を傷つけることになるかもしれないこと、中に立つ方はよくよく心なされるのがよいのではないのでしょうか。

また、編集責任者にもお願い。寄稿はなんでも取り上げる方針と伺いました。問題の拙稿「新治筑波を過ぎて…」がそれに該当するかもしれないませんが、低次元の不毛の論争が続く可能性があるものまで、お人よしに掲載することはどうでしょうか。人を育てる意味で私たちの拙い投稿を受け入れていただけるのはありがたいことです。しかし、読者の皆様がうんざりするおそれがあるようなも

のは、やはり「仕分け」が必要になると思います。
「風」は、編集長の風格ある巻頭の言葉のもと、
キャリアのある方々がそれをおくびにも出さず、
一市民として気の赴くままに自由に自分を披瀝さ
れている。そこがすばらしいのではないでしょう
か。

ついでに。お忙しいなかの編集・打ち込み・校
正・印刷・発送等々頭の下がる思いです。疲労が
重なり、ミスも出ることは目に見えています。私
でも、校正ぐらいはお手伝いができるかもしれま
せんから、遠慮なくご用命ください。ちなみに、52
号の拙文「恋瀬川…」の中で、原稿と違う印字が
9箇所ありました。また51号の「新治…」には同
じく誤字が5箇所、そのほか、振り仮名落ちが40
箇所前後ありました。過労も限界なのではと案じ
ております。

寒さも募ります。どうぞ、健康専一、ご精進く
ださい。

先日のであった。打田兄と鈴木さんの原稿に
ついて話しをしたのであったが、我々としては、
鈴木さんのご心配いただいた不毛の論争の続く可
能性のある原稿については考える必要もあるのだ
は、という助言は大層嬉しいお言葉であるが、稚
拙で不毛に陥りやすいものであっても、今回読者
の方からのお便りのように大切なふる里に降る物
語の種のような御意見を頂くことにもなるので、極
力現状の方針で行こうという事にした。

今回の、鈴木さんのテーマでは、小生の考えで
はあるが、これ以上の話しには繋がっていかない
であろうと思う。野次馬的な思いを言おうと、不毛
ではあるがもうひと転がりすると愉快なのだ…。

鈴木さんのお話して、頭が痛いのはタイピング
ミスである。この話しを、風の会のホームページ
でお世話になっていいる木村さんから、うちこみ
のお手伝いしますよ、とお話し頂いたのであるが、
原稿の集まりが印刷の間際になるものが多く、お
願ひしている時間も、鈴木さんの校正のお手伝い
しますよ、のお話にも甘えられないのが現状です。
会員僅か6名ですが、毎月誰ひとり脱落なく書
き続けているので、これを継続していくには、印
刷前日に打ちこむのも暫く、我慢して続けるしか
ないだろうと思っている。でも、小生もこの状態
がいつまでも続けられるとは思っていないので、
少しずつ変えていかねばと思っている。

当会報の編集方針の一つであるのだが、漢字の
ルビは基本的に打たない事になっている。作者とし
てどうしても打ちたいルビは（ ）に級数を落し
てつけるようにしている。これは小生の作家とし
ての考え方であるが、ルビを打つ必要はないと思
っている一人である。それこそ重箱読みのようなも
のはルビの必要もあるが、基本的にはどうしても
も読めなくて読みたいのであれば辞書を引け、と
敢えて乱暴に考えている。

最近、よく韓国ドラマをみるのであるが、実に
観客（視聴者）を飽きさせない構成かと感心させ
られる。日本のただただ無意味な糞リアリズムで
はない映像物語としての展開が工夫されている。
そのドラマの中で、感心するのはコンピュータ
によるネット社会の普及である。日本のドラマで
は、必ずその情報はネットで得た、と蛇足の台詞
を入れさせられるのであるが、それが無い。小生
と同年代の普通の後期高齢者であっても、日常の

コーヒープレイク

唾液の効用

菅原茂美

人間の体は、言わば一本の管（くだ）のよう
なもの。基本的にナマコ（海鼠）と同じ、口か
ら肛門まで、一本の管で、できている。雨樋、
土管、トンネル等いずれも、スムーズに、内容
物が通過しなければ、エライことになる。

さて人体でも、その管の中を食べた物が、消
化吸収後、不要物を順調に排泄できれば、まさ
に健康。その潤滑油の作用をするのが唾液。

その唾液が、心理的に好ましい雰囲気なら潤
沢に分泌される。逆に緊張や憎しみなどネガテ
ィブな雰囲気なら、唾液腺の血管が収縮し、唾
液は、スムーズに分泌されず、胃痛等不健康の元。
南米のアルパカ（ラクダ科）は、攻撃相手の
目を狙って唾液を飛ばすが、人は和やかな談笑
中は、唾液の分泌が促進される。

人類は野生時代から、雄はライバルや猛獣と
の戦いなど緊張の連続。現代も企業戦士等、心
休まる暇がない。その点、雌は幼子に接し笑顔
が絶えず、仲間との談笑も多い。男が女より長
生きできない遠因の一つは、この辺にあるのか
も…。

そこで名（迷）医の処方箋。動物は唾液タツ
プリー、傷口を舐めて治す。人も動物。唾液で傷
心が治らぬはずがない。男女の唾液交換（ディ
ープキッス）は傷心を癒す特效薬。活力の源。
天祐神助のその相手？… それは、自分で探し
なさい。

一部としてネットを使っている事が描かれてある。この情報化社会と言われる時代、日本が一番遅れている事が良く解る。

先日の中国の漁船追突事件の映像流出などをみていると、多くの人がネット社会を批判する様な意見を言っている。とんでもない間違いである。ネットを十分に使えないから、情報の流出などの危機管理意識がないのである。どんなものにも便利の裏面には便利さと同等かそれ以上のリスクがある。そのリスクを回避するためには、便利を排斥するのではなく熟知することが必要なのであるが、それが先進国日本と自負する国民の全体になるのだ。

ネットを使いこなせないで浪費している良い例は石岡市のHPを見るのが一番である。HPが開設されているだけで、その機能が全くと言ってよい程果たされていない。お粗末すぎてみる気にもならない。こんな状態で、石岡を元氣になんて言葉をよく言えたものだと思え返る。

小生もパソコンは充分に使こなせるわけではない。しかし、年齢を重ねるに従って、必要性を強く感じている。特に、石岡から出ることがなくなってきたからは益々ネットの重要度が大きくなってきている。もう二、三年もしたら総ての本がネットブックになるのではないだろうか。足腰が立たなくなっても、本屋に出掛けることなく、読みたい本が思った瞬間に手にすることが出来るのである。役所への手続きにしてもそうなのだ。

鈴木さん、木村さんからの打ち込み・校正お手伝いのお話しを頂き、当会も会員の原稿はデータでしか受け付けないようにしようかと思う。原

稿の責任はすべて自分が持つ。そして、足腰が立たなくなっても、毎月原稿を書き続ける。会報も紙ではなく、ネットに電子会報にする。読者は一瞬にして全世界を相手にすることとなる。正直言って、韓国ドラマを見て日本の中高年の時代遅れ振りは酷いものだと実感させられた。韓国ドラマが人気があるのは、単にヨン様がいるからではない事を痛感させられた。

編集事務局

〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>

朗読劇・朗読舞劇研究生募集!!

あなたの隠れた才能を ことば座に発見してみませんか

ことば座では、朗読舞及び朗読舞劇に朗読する、朗読俳優および朗読舞俳優志望者を募集しております。

研修期間は12ヶ月。

演劇としての朗読の基礎と演技手話を学んで頂き、研修後は、ことば座劇団員として活動して頂きます。

◎募集要項

募集コース：朗読劇&朗読舞劇俳優養成コース

募集人員：6名程度（最大10名まで）

※面接及び朗読と簡単な表現試験有り

養成期間：1年（入塾は随時受付けています）

指導月4～6回

受講料：月額30,000円（全・半納割引有り）

※詳しくは、ことば座事務局 0299-24-2063（担当：白井）までお問い合わせください。

2011年2月6日（日曜日）美浦村：陸平遺跡・文化財センタ

—

陸平遺跡：縄文の森に舞う小林幸枝

縄文の森コンサート（朗読舞&野口喜広オカリナ・コンサート）

「ことば座朗読舞公演」

朗読舞「ふるさとの風に吹かれて」（オカリナの風の声に乗って常世の国の心を舞う）

朗読舞劇「縄文の舞い」（朗読舞の小林幸枝がモダンバレエの柏木久美子と初共演）

※矢野恵子のパーカッションのリズムによって小林幸枝と柏木久美子が舞いの言葉を交わす。

世界初の舞のコラボレーションが実現。

野口喜広オカリナ・コンサート

ギター文化館発

「常世の国の恋物語百」

ふる里とは、物語の降る里です。ふる里に降り落ちた物語は未来への道標。守るべきは里に降り落ちた物語を確りと伝えることです。

ことば座は、里に降り落ちた物語を朗読と手話を基軸とした舞（朗読舞）に表現し、明日の夢を伝える劇団です。

2011年「ことば座」定期公演

第20回公演「常世の国の恋物語百：第27話」 6月17日～19日

第21回公演「常世の国の恋物語百：第28話」 11月11日～13日

ギター文化館協賛：ことば座新企画「**里山と風の声**」

《野口喜広のオカリナと白井啓治の詩の朗読コンサート》

第1回コンサート3月6日 第2回コンサート9月11日

夏の世の篝火舞（予定）8月28日

夏の夜空の下、篝火を焚きその灯りに照らされての朗読舞観賞会。

ことば座 315-0013 茨城県石岡市府中5-1-35 ☎0299-24-2063